

平成 22 年 当科におけるインフリキシマブ一次・二次無効に対する対応-増量、短縮を中心に-  
福井赤十字病院

森瀬 博子 高木 治樹 ほか

【目的】インフリキシマブ(IFX)投与中の RA 患者において、一次・二次無効例を経験し、その対応について、有効性を評価した。

【方法】IFX を投与された RA 患者 88 例のうち一次・二次無効となった症例に対し対応を行い、有効性と安全性を評価した。【結果】IFX 投与後、一次無効例を 1 例、二次無効例を 35 例経験した。そのうちスイッチを行った症例は 8 例であった。一次無効となった 1 例は対応が困難でスイッチを行った。対応により継続しえた症例は 26 例、74%であった。対応の詳細は、MTX の増量が 15 例、IFX の FB を超える増量が 16 例、投与間隔の短縮が 3 例、投与前のステロイド静注が 13 例、タクロリムス(TAC)の add on が 14 例であった。対応が重複している症例も多く見られた。IFX の FB を超える増量は 16 例中 12 例、75%で有効であった。IFX の投与間隔の短縮は 3 例中 2 例、66%で有効、TAC を add on した症例は 14 例で経験し、有効率は 57%であった。FB を超える増量や短縮を行った症例は、現在まで、新たに重篤な有害事象を認めず、全例が継続可能であった。

【結論】IFX が二次無効となった症例では、IFX の FB を超える増量が 75%と高い有効性を認めた。今後は IFX の増量や短縮を行うタイミングについて検討を重ね、より効果的に対応を行う必要性があると考えられた。I

IFX の FB を超える増量は安全に行われており、有害事象の新たな発現は認めなかった。

平成 20 年 インフリキシマブ投与における継続困難例に対する対応経験

【目的】インフリキシマブ(IFX)投与中の RA 患者において、一次・二次無効又は有害事象により継続困難な症例を経験し、その対応を検討した。

【方法】対象症例は IFX を投与した RA 患者 62 例。調査時の継続率は 72%であった。CRP、症状の推移により一次・二次無効と判断した症例、及び有害事象の発生した症例に対する対応を調査した。【結果】IFX 投与後、一次・二次無効例を 22 例経験したが、中止に至った症例は 15 例であった。有害事象により中止に至った症例は 7 例、対応により継続しえた症例は 45 例であった。一次・二次無効に対し、MTX・IFX の増量、投与間隔の短縮、投与前のステロイド静注、タクロリムス(TAC)の add on により対応を行った。投与時反応に対しては投与前のステロイド静注が最も有効であった。【結論】IFX の継続困難例に対し、対応により効果回復、有害事象の軽快を認めた症例を多く経験した。特に無効例に対して TAC の add on を行い、有用な結果であった。